

連載終了から約三年、全面改稿を経て、祝・刊行！

「発売はいつになりますか？」と読者から多数の声を頂いておりました『聖なる怠け者の冒険』。ようやく刊行することができました。「全面改稿」といわれても、どのあたりが変わったのか、気になる方もいらっしゃるはず。そんなあなたのために、森見さんのご了解を得て、新聞連載時の原稿を一章分、特別掲載しました。読み比べてみると、いろいろ発見があるはずです。合わせてお楽しみください。

(※以下より原稿となります)

聖なる怠け者の冒険

第一章 仮面の男

むかしむかし。

と言っても、それほど昔ではないのである。

京都の街に怪人が現れた。

朝のイノダコーヒでは地元商店主たちが怪人の噂（うわさ）を囁（ささや）き合い、錦市場の裏手にある銭湯の脱衣場には怪人の華々しい活躍を報じた新聞記事の切り抜きが掲げられ、夜更けの先斗町では怪人の正体を巡る熱っぽい議論がきっかけで乱闘騒ぎが起こった。怪人が碁盤の目を駆け抜けるたびに、街路を行く乙女たちは頬（ほお）を赤らめてその雄姿を見送り、舞妓（まいこ）たちは黄昏（たそが）れる花見小路でくるくる踊った。

新京極の某土産物屋は、怪人の姿を模した「怪人キーホルダー」をワゴンに積み上げて、観光客の懐を狙ったが、これはまったくの空振りに終わった。若者で賑（にぎ）わう新京極を歩いてみれば、土産物屋の軒先で、金閣寺の模型や生八つ橋や招き猫に交じって怪人キーホルダーがひっそりと売れ残っているのが今でも見られる。

「そんな話、聞いたこともない」

それはおかしい。怪人は雑誌の取材に答えたこともあり、それどころか生意気にもピカピカ輝く金屏風（びょうぶ）を背に記者会見さえ開いたことがあるのである。

まだ怪人の活躍が広く知られていなかった頃、京都市動物園やハリストス正教会の裏手で彼を見かけた人々は必ず叫んだ——「ヘンタイ！！」と。

これは無理もないことである。

怪人は虫食い穴の開いた旧制高校のマントに身を包み、ステキに可愛いタヌキのお面をつけていた。そんなかっこうをした人物が昼日中に路地裏でうごうごしていたら、「悪いことをしてるんだろうな」と邪推したくなるし、手間ひまを惜しまぬ正義の人は警察に電話をかけるだろう。かくして、勤勉なる一般市民からの通報で鳴りやまぬ電話に京都府警は大いに迷惑し、このことが怪人と警察との間に容易に埋めがたい溝を作った。ただし一般

的に言って、怪人と警察はあまり仲良くしないものである。

怪人は街の人々を驚かせたが、これといって迷惑なことはしなかった。それどころか、むしろ怪人が役立つことが分かってきた。三条大橋のたもとで泣いている迷子を親のところへ連れていったり、夜の木屋町で暴れている酔漢を取り押さえたり、自転車泥棒を捕まえたりした。妙に可愛いタヌキのお面で一般市民を驚かすかたわら、彼は無闇（むやみ）に人助けばかりしているらしいのだ。

活躍が世に知られるにつれ、くだんの怪人はさまざまな名で呼ばれるようになった。「ぼんぼこ仮面」と呼ぶ人もあり、「たぬキングNo. 1」と呼ぶ人もあり、「一日一善の風来坊ビリー・ザ・タヌキ」と呼ぶ人もあった。

工夫を凝らした愛称が溢（あふ）れかえったあげく、まるで数百人のタヌキ怪人が街を闊歩（かつぽ）しているようなただならぬ気配が漂ってきた頃、怪人みずから某誌の秘密取材に答えて自分の名を述べた。

「我が輩は八兵衛明神である」

八兵衛明神とは何か。

寺町通と河原町通に挟まれた街中に、カレー店や飲み屋が軒を連ねる「柳小路」という古い路地がある。

油断していると、どこにあるのか分からなくなるほど細くひっそりとした路地で、たとえ偶然通り抜ける幸運に巡り合ったとしても、「もういっぺん通ってみようかな」などというエエカゲンな心がけではとうてい再発見できない。それほど細い路地なのだ。吹き抜ける風に若い柳が枝を揺らし、まるで秘密の抜け道といった可愛らしい風情である。

その路地には、大小さまざまな陶製のタヌキがみっちり置かれた一角がある。その昔、この界限（かいわい）にあった寺の境内に棲（す）みついていたタヌキを祀（まつ）ったという噂（うわさ）だ。

これこそ怪人が名乗る「八兵衛明神」に他ならない。

「我が輩は八兵衛明神の化身として、人々を助けるために働いている。言うなれば、正義の味方である」と怪人は主張した。「もし呼びにくければ『ぼんぼこ仮面』でかまわない」まったく、驚くべきことだった。

さて。

ぼんぼこ仮面が京都に現れてから一年ほどたった夏のことである。

怪人の正体を掴（つか）むために、柳小路にある煙草（たばこ）屋の二階に張り込んだ私立探偵がいた。探偵は昭和の残り香漂う年代物の扇風機を抱きかかえ、無闇（むやみ）に煙草を吹かした。簾（すだれ）越しに路地を見下ろして、八兵衛明神を見張った。しかし、タヌキ野郎といえども神の化身、そうやすやすと尻尾（しっぽ）を掴ませるわけがな

い。

賄い付きの下宿代および莫大（ばくだい）な煙草代と引き換えに目撃できたのは、八兵衛明神にお参りする一般市民の姿ばかりである。怪人は姿を見せない。

探偵は日に日に暑さを増す地獄のような四畳半に、祇園祭の宵山から数えて二週間ほど踏みとどまったが、猫を溺愛（できあい）する婆（ばあ）さんが作るまずい味噌（みそ）汁や、仕事の邪魔をする猫、おのれの仕事のあてのなさに、ほとほとウンザリしていたようである。

八月になった朝、気がかりな夢から目覚めると、漬物石みたいな猫が腹に座っていた。彼が怒り心頭に発して「このでぶでぶのでぶ猫め、猫汁にしてやるぞ！」と叫ぶやいなや、血相を変えた煙草（たばこ）屋の婆さんが寝間着姿のまま二段飛ばしで階段を駆け上がり、彼の脳天に箒（ほうき）を叩（たた）き込んだ。かくして無能な探偵は煙草屋から明け方の路地へ追いだされたのである。

探偵は恨めしそうに八兵衛明神を見やったあと、とぼとぼと歩きだした。

手ぶらで事務所に戻るのがつらいのか、彼は暗澹（あんたん）たる顔つきで人通りもない街を歩き回った。河原町通から高瀬川へ抜けていくとき、立誠小学校の北側を抜ける路地を通った。昭和三年に建ち、現在では廃校になった校舎はくすんだ茶色で、壁面にたくさん並んだ縦長の窓はどれも暗くて汚れている。木屋町通に出ると、高瀬川を覆うように茂った並木からは、小学校四年生の夏休みに見たあの入道雲をふと思いだしてしまいそうな蝉（せみ）の音が響いていた。その懐かしい響きに釣られるようにして、探偵はふらふらと高瀬川を右に見て、木屋町を下っていった。

高瀬川の対岸には小学校の塀が続いている。重厚な玄関を通り過ぎていくと、やがて川にかかる小橋の向こうに、校庭へ通じる門が見えてくる。

なにげなく校庭を覗（のぞ）いた探偵は、ギョッとしたように足を止めた。

がらんとした校庭の真ん中に小学生用の椅子（いす）がぽつんと置かれていて、一人の青年が窮屈そうに座っている。

歳（とし）は二十代後半といったところ。白い半袖のワイシャツはよれよれでズボンには泥がつき、髪はぼさぼさである。頬（ほお）が不健康に青ざめていることから、酒精に惑わされて一夜を棒に振り、酒中模索の果てにこの校庭へ辿（たど）りついたらしいと見当がつく。ところがよく見ると、彼は椅子の背に縛りつけられており、両脚もまた椅子の脚に縛られているのである。

何か事件に巻き込まれたようだ。

その青年の前に奇怪な人物が立っている。真夏だというのに真っ黒なマントに身を包み、紙製のタヌキの仮面をつけている。砂埃（すなぼこり）を巻き上げる風がマントを揺らしている。そんなおかしな格好をするやつは探偵の知るかぎり、この街に一人だけだ。

「あいつ、こんなところにいたか！」

探偵は小さく呟（つぶや）いた。

素早く並木の陰に身を隠し、携帯電話で事務所に電話をかけた。彼の助手は事務所に寝泊まりしているのである。ややあって電話が通じると、「浦本探偵事務所でございますよコノヤロウ死ね」と、ただならぬ声がした。朝五時に叩（たた）き起こされた助手は親兄弟さえ叩き殺しかねないほど不機嫌である。「そう怒らないで」と探偵は低姿勢に出た。「今、木屋町の立誠小学校にいるんですけどね。来てくれる？」

「不可能ですね」

「え、それは物理的に？」

「いや、感情的に」

『感情的にいや』とか、そういう問題ではないんだよ。頼むよ。今すぐ来てちょうだい」寝起きの悪い助手は渋っていたが、探偵が「タヌキ仮面が出たよ」と付け加えた途端、何も言わずに電話を切った。「来てくれるのかなあ」と彼は心配そうに呟き、用心深く校庭を覗（のぞ）いた。この浦本という探偵が何を企（たくら）んでいるかということはひとまず脇において、我々は怪人と青年の対面の一部始終を見届けなければならない。

つまり、物語はここから始まる。

○

その明け方の校庭にて、小和田青年は暢気（のんき）に悪夢を見ていた。

彼には「世界三大きれいな動物」がある。トンキンシシバナザルとアルパカとオカピである。ところが、勤め先で同じ研究チームに所属する恩田先輩には「世界三大好きな動物」があり、それが狙い澄ましたかのようにトンキンシシバナザルとアルパカとオカピであった。先輩は購読しているナショナルジオグラフィック誌からそれらの動物の写真を切り抜き、デスク前にぺたぺた貼（は）った。実験に疲れたときは、それらのコレクションを眺めて、「ステキ…」と呟いて心を癒やしている。そして遊びに来た「憂鬱（ゆううつ）の貴公子」立松君とアルパカ談議で盛り上がったりする。

=====

「なんでアルパカなんぞ好きなんですか？」

と小和田君が嘆くと、

「なぜなら前世がアルパカだからです」

恩田先輩は飄々（ひょうひょう）としている。「今も心はアルパカさ」

「このアルパカという連中はじつに胡散（うさん）臭い顔つきをしてる。きっと腹黒いに違いないのです」

「君は僕の前世にケチをつける気なの？」

そして恩田先輩は哀（かな）しそうな顔をするのだが、眉を寄せた切なそうな顔がどことなくアルパカに似ていたりするのだから困ったものだ。先輩の集めた写真を毎日見せられているから、きれいな動物であるはずのトンキンシシバナザルとアルパカとオカピが脳裏から離れなくなってしまった。

その朝、小和田君が見ていたのはこんな夢だ。

彼は京都の狭い路地を逃げ回っている。日暮れなのか、空が厚い雲に覆われているのか、街は薄暗くて人気がない。走りながら見上げると、雑居ビルの屋上を跳ねるようにして追いついてくるのはトンキンシシバナザルである。のっぺりとした猿顔がちらりと覗（のぞ）いただけで、小和田君は怖くて縮み上がる。なんとか振り切ろうとして十字路を曲がると、自動販売機の前でもぞもぞしているのはオカピである。気持ちが悪くて反対側へ逃げると、路地の道幅は狭くなり、どんどん息苦しいところへ追いつめられていく。かといって恐ろしいから引き返すこともできない。植木鉢や室外機や信楽焼のタヌキを踏み越えるようにして奥へ進むと、ついに路地は行き止まりになり、そこにあの「何を考えているのか分からない動物」の王者たるアルパカが立っている。キョトンとした目つきをして、首を長々と伸ばしている。小和田君を見つめながら、ずいずいと近づいてくる。

「うわあ！」

小和田君は叫んで目を覚ました。

ところが身動きがとれない。

ようやく彼は、自分がガランとした広場の真ん中において、小さな椅子（いす）に縛り付けられていることに気づいた。首を捻（ひね）ると、いやに古風な校舎らしいものが見えた。ここは校庭らしい。空はすでに明るい。頬（ほお）を撫（な）でる涼しい風の感触から、「夢ではない」と考えた。

しかし夢ではないとすれば、自分の前に立っているこの黒マントのへんてこな男は何者か。

=====

不気味な黒いマント、ぼさぼさの髪、そしてタヌキのお面。そのお面は、節分の日にスーパーで豆まき用の豆を買えばもれなくおまけでついてくるような安っぽい作りで、両脇についた輪ゴムで耳にひっかける仕組みになっているらしい。

「これが噂（うわさ）のぼんぼこ仮面か？」

彼はそこでようやく気づいた。

それにしても僕はなぜ縛られているのだろう。そうか、酔っぱらっているうちに何か事

件に巻き込まれたのだ。そうして困っているところを、ぼんぼこ仮面が助けに来てくれたのだ——ならば安心！

という結論に至るまで、たっぷり十分はかかっている。

その間、怪人は小和田君を見下ろしたまま、彼の身を縛る紐（ひも）をほどいてくれようとしなない。

眠気がさして、小和田君はあくびをした。彼はアルパカに怯（おび）える男ではあるが、意外に神経の太いところもあるのだ。睨（にら）めっこをしてもほどいてくれそうもないから、「おはようございます」と言ってみた。

「おはよう、小和田君」

ぼんぼこ仮面は重厚な声で言った。

「なんで僕は、縛られてるんですか？　ここはどこ？」

「自分の胸に聞いてみたまえ」

「あれ？　僕、何か悪いことをしましたか？」

「自分の胸に聞いてみたまえ」

強い風が校庭の砂埃（すなぼこり）を吹き散らした。

小和田君は叱（しか）られた小学生のように口をすぼめ、昨夜の記憶を辿（たど）って見た。

前日の夕方、研究リーダーの津田さんと月例発表の打ち合わせをしてから、寮に住む立松君の様子を見に行った。立松君は小和田君の同期で、あまり自分の仕事を気に入っておらず、始終憂鬱（ゆううつ）そうな顔をして、見ようによっては美しいはずの横顔を台無しにしている人であり、それゆえに「憂鬱の貴公子」と呼ばれている。彼は一昨日から無断欠勤していて、その日も寮にいなかった。たまたま顔を出した別の同期といっしょに立松君の身の上を案じていたら、危うく所長に見つかりそうになった。小和田君は大切な金曜の夜を台無しにしたくなかったから、便所に隠れた。

そうしていったんは所長の魔手を逃れて研究所を抜けだしたものの、近鉄電車竹田駅のホームで捕まってしまったのだ。

=====

その後、先斗町の居酒屋で飲んでから、四条大橋を渡って祇園縄手の後藤所長お馴染（なじ）みのスナックまで行き、「22才の別れ」を熱唱して拍手を浴びた輝かしい記憶がある。所長が即興でピアノを弾きながら、その場にはない立松君を勇気づける歌「タテマツ君の愛に包まれたなら」を歌っていたことも憶（おぼ）えている。そのあと、理由もなく四条大橋を行ったり来たりして笑っていたが、酔漢のみ味わえる喜びがあったのだろう。少なくとも、世間に顔向けできないような悪事を働いた覚えはない。それにしても自分のような愛すべき部下を置き去りにして、あの強面（こわもて）スキンヘッドの所長はどこへ消

えたのか、と思ったが、よく考えてみると、所長といっしょに高瀬川沿いを歩きながら、白み始めた空を見上げた記憶がある。「気をつけてお帰り」と手を振りながらダンディに歩み去る所長の頭が朝の光につやつや輝いていたことも思い出した。だとすれば記憶が途切れているのは、ほんの僅（わず）かな間にすぎないのだ。

「胸に聞いてみたけれど、分かりません」

小和田君は堂々と言った。

「なるほど」とぼんぼこ仮面は頷（うなず）いた。「おまえは先斗町の駐輪場前に座り込んでうたた寝をしていた。ここまで運んできて、椅子（いす）に縛ったのは我が輩だ」

「僕は縛られるようなことは何もしてない！」

小和田君は身じろぎした。「ほどいてください。さあほどいて！」

「我が輩を知っているか？」

「正義の味方が善良なる市民をいじめていいのか」

ぼんぼこ仮面はお面をつけているので、表情は読めない。

しかし小和田君には、相手が嘲笑（ちょうしょう）したように感じられた。

「八兵衛明神の化身、ぼんぼこ仮面とは我が輩のことだ。この一年、街に暮らす人々の小さな不幸を取り除くために戦ってきた。これはまことにキビシイ戦いであった。迷子を助け、自転車泥棒を捕らえ、忘れ物を届けた。厳しくはあるが、地味な戦いだ。『正義の味方』を名乗るなら、そんなチンケな不幸は放っておいて、巨悪と戦えと言う人もある。しかし言いたいやつには言わせておこう。我が輩には我が輩の生き方がある。我が輩は己の為（な）すべきことを為す、それが…」

=====

ぼんぼこ仮面は首をかしげた。「…聞いてるか？」

「はあ」

話の行方が見えないので、小和田君はボンヤリしていた。

「そう、我が輩はこの街に充（み）ちる小さな不幸と戦ってきた。しかし、この春頃（ごろ）から、我が輩はこの街にひそむ邪悪な存在をひしひしと感じるようになった。どの街角でも、その不吉な影とすれ違う。あたかも、街の隅々まで目に見えぬ奇妙な糸が張り巡らしてあるかのごとし。その恐るべき巨大組織は得体（えたい）の知れない神秘的なシステムを用いて、人々に数限りない小さな不幸を供給している。神の金槌（かなづち）で叩（たた）きつぶして回っても、これではきりが無い」

「それはたいへんですねえ」

「我が輩が戦っている相手はある特殊な犯罪組織である。とうてい警察の手に負える相手ではない。その正体を見極めようと、我が輩はさまざまな努力を重ねてきた。その結果、この憎むべき組織の中央に一人の男がいることが明らかになった。その男は、街を覆う陰

鬱（いんうつ）な蜘蛛（くも）の糸の中樞にあぐらをかき、善良な市民のようなツラをしながら、この一年で少なくとも千人を超す人々を苦しめてきた。彼こそ悪の帝王である。我が宿敵である」

「ひどいやつ」と小和田君は言った。

「許せないと思うか？」

「もちろん。そんな大悪人は懲らしめるべきです」

「いけしゃあしゃあと！」

ぼんぼこ仮面はマントを震わせ、足元の砂を蹴（け）った。「それがおまえだ！」

「え？」

小和田君は絶句した。

白んでいた空は明るさを増し、東山の向こうから照らす陽（ひ）がビルの壁面を輝かせている。ぼんぼこ仮面は空を見上げ、「今日も暑くなりそうだ」と言った。

「我が輩にはもう時間がない。引退する前に、おまえと決着をつける」

「待ってください。話がぜんぜん分かん。僕は何も悪いことはしていない」

「一日だけおまえにチャンスをやろう」

「やい、正義の味方！ 人の話を聞け！」

「考え直すならば今のうちだ」

ぼんぼこ仮面は小和田君に人差（さ）し指を突きつけた。

=====
「もしおまえが悔い改めず、明日が来てもなお悪事を働き続けるならば、八兵衛明神が怒りの鉄槌（てっつい）を下す。逃げられはしないぞ。どうせ警察には捕まるまいとタカをくくってきたのだろう。しかしおまえは誤った。この世にはぼんぼこ仮面がいるということをお忘れな」

そして、怪人はマントを翻して走り去る。

「ちょっと待って！ ほどいて！」

小和田君は叫んだが、相手は廃校の陰へ姿を消してしまった。

朝の校庭に小和田君だけが残された。

「どうしたものか。正義の味方に喧嘩（けんか）を売られた」

彼はぶつぶつ言った。「しかも身に憶（おぼ）えがない」

○

小和田君は某製薬会社の研究所に勤める研究者である。

修士課程を修了して働きだしてから、今年で三年目になる。程度の差こそあれ、どんな仕事にもつらいことはあるが、彼はまだ勤めだして日が浅く、ぼんやりしたところもあるから、たとえば同期入社立松君のようにことさら憂鬱（ゆううつ）な顔も見せない。社

会に貢献していると漠然と信じて、そこそこ朗らかに働いている。

勤め先は近鉄京都線の向島駅から、西に広がる田園地帯にある。京都駅から各駅停車に揺られて十五分ほどの南へ行ったところで、いわゆる「古都」らしい風情はない。

その一帯は世界の果てのような雰囲気漂っており、研究所で暮らしていると、世界は「田園」と「工場」と「京滋バイパス」だけでできているように思われてくる。遠い西の果てに「SATY」が見えるが、まるで中世の魔術師が住む塔のようにいつも霞（かす）んでいるので、果たして本当に「SATY」があるのか、誰一人として確信が持てない。研究所から自転車で十分ほど北へ走ると、宇治川が流れていて、その彼岸には歴史ある伏見桃山の街が異世界のように広がっていた。

その年の三月まで、小和田君は研究所の敷地内にある独身寮で寝起きしていて、朝早くに目が覚めたときは宇治川の堤まで自転車で走ることになっていた。宇治川にかかるトラス橋を近鉄電車が渡っていくのを眺めながら、宇治川公園で缶珈琲（コーヒー）をゆっくり飲むのが、小和田君のささやかな趣味の一つであった。

=====

小和田君は学生の頃、テレビで街頭インタビューを受けていたサラリーマンが「一日一本の缶珈琲（コーヒー）が楽しみ」と語っているのを見た。「そんなことが本当に楽しみに成り得るのだろうか」と不思議に思っていたが、自分がサラリーマンになってみると、これが本当に楽しくなったので驚いた。

「人間はその気になれば、缶珈琲一つで幸せを噛（か）みしめることができます」

小和田君が缶珈琲のもたらす小さな幸福について熱弁を振るっていたら、恩田先輩は彼の肩を優しく叩（たた）き、「今度おいしいものを食べに連れて行ってやるから」とアルパカみたいな顔で言ったものだ。「あんまり思い詰めるなよ」

「思い詰めてるわけではないです」

「いいからいいから。俺（おれ）には分かっている。分かっているよ」

このように恩田先輩はなにくれとなく気に掛けてくれるのである。

恩田先輩は小和田君が所属する研究チームの二年先輩にあたる。化合物の合成を専門にする技術者を含めて、一つのチームには十人ほどの人間が所属しているが、一番年齢が近いうえに、同じ大学の出身者であることもあり、小和田君は恩田先輩ともっとも親しい。

研究所内にはちょうど大学の研究室のようにいくつもの研究チームがあって、それぞれが固有のテーマについて研究を進めている。研究リーダーの津田さん指揮のもとに小和田君たちが試験管を並べて研究しているのは、心臓病にきく新薬の開発である。研究の成果によっては、研究リーダーが交代させられたり、別の研究チームによる吸収合併が行われたりするわけで、つまりはこの研究所内でも静かな弱肉強食の争いが繰り広げられているわけだが、小和田君は毎日おのれの任務を果たすことに精一杯（せいいっぱい）であるか

ら、まだそういった事情には詳しくない。

就職してからその年の三月まで、小和田君の暮らしは寮が中心だった。

平日は研究所で仕事をしているし、週末は寮の自室で勉強したり寝そべったりしている。なにしろ研究所のまわりには田んぼしかないから、一人では遊びに出かけるのも億劫（おっくう）だった。そうして本を読んだり、仕事に関係する勉強をしたり、手紙を書いたりする。ごくたまに、同期の連中と旅行に出かけたり、恩田先輩やその恋人の桃木さんと食事に出かける。

そしてときどき、後藤所長から飲み会の誘いがあった。

=====

後藤所長は歴代の所長の中で、もっとも異彩を放つ人物として知られていた。四十代後半の独身である。融通無碍（ゆうずうむげ）の世間話を武器に、研究所内に情報網を張り巡らせ、あらゆることを知っている。頭を剃（そ）り上げてスキンヘッドにして、淡く色のついた眼鏡をかけ、今にも相手を殴り倒しかねない顔つきをし、結婚式を取り仕切る外国人神父のように不思議な抑揚で喋（しゃべ）る。とても研究所の所長には見えない怪人だが、その高速回転する頭脳と滲（にじ）み出すオーラで、研究所では誰からも恐れられていた。

所長室はたまたま小和田君の所属する実験室の隣にあったが、所長はまるで落ち着きのないう小学生のように、すぐにそわそわと歩き回った。そして廊下を歩いている小和田君を掴（つか）まえて話しかけることがしばしばあった。そのうち、酒に誘われるようになった。所長と小和田君の間になぜ年の差を超えた友情が成立したのか、その理由は謎である。

酔っぱらった所長が小和田君に訊（たず）ねたことがある。「君はいったい何を楽しみに生きているのですか？」

小和田君は趣味の少ない男で、缶珈琲（コーヒー）を飲むことを除けば、シャーロック・ホームズの手がけた事件を年代順に並べるぐらいしか、特筆すべき趣味はない。運転免許も持っていない。自転車でうろうろする以外には運動らしいものはしないし、人に誘われなければ遊びにも出かけない。にもかかわらず、「なんとなくぶらぶらしているだけでも楽しい」と本人は主張した。ときには空気を吸っているだけで楽しい、という奇跡的瞬間があり得るらしい。たとえば、日が暮れたあとに駐車場に出て、夜空にちらつきだした星々を見上げたとき。あるいは、真っ暗な田園地帯をぶらぶら歩いて行って、資材置き場の塀沿いにある馴染（なじ）みの自動販売機で缶珈琲を買うとき。田園の彼方（かなた）に、いまだ行ったことのない遠い街や、京滋バイパスのオレンジ色の明かりがSF映画のように輝いているのを眺めるとき。

「何もかもそれなりに楽しいですね」

「意地を張ることはありません」

「意地を張っているわけではありません」

「君は仕事している。勉強もしています。それは認める。しかし私生活においては怠け者です。もっと私生活の充実という観点から、人生を見直す必要があるでしょう」

「所長はそういうムツカシイことを言うから嫌いだ」

「所長の意見と茄子（なす）の花は千に一つの無駄もない」

所長は妙なことを言って禿（はげ）頭を光らせた。

「若い頃にきちんと遊ばなかった人間は、歳（とし）をとってからへんな汁が出てくるのです。汁気は若いうちに出し切っておかないと、私のように枯れたステキなおっさんにはなれやせん」

「所長がステキであることは認めますが、枯れているとは思えないなあ」

小和田君はぶつぶつ言った。「まだまだコッテリしてるぞ！」

「多少のコッテリは愛嬌（あいきょう）です。これでもし私が若い頃に遊んでいなければどうなる。もう今ごろは腐った汁にまみれて怪獣ヘドラのようになっていたことでしょう。男汁をナメると危険です」

「男汁って何ですか？ 成分は？」

「分かりませんが、とにかく、何か、へんてこな汁ですよ。青春の燃料ですよ」

「男汁を出し尽くすには、どうすればいいんですか？」

所長は眼鏡の向こうで目を細めた。そうすると、人を二三人殺していそうな凄（すご）みが漂う。

「そうですね。たとえば街中に住んでみたらどうですか？ 普通に暮らしているだけでも、きっといろいろ刺激がありますよ。寮の生活は、やっぱり静かすぎるし、君は放っておくと部屋の外に出ないから」

「べつに今のままで幸せだけだなあ」

「いやいや、なにごととも経験ですよ」

酔っぱらい所長の言うことなんか聞いてやるものかと思っていたが、何度も考えるうちに、小和田君は気分転換に引っ越してみるのも面白いと思うようになった。二年間独身寮でタニシのように静かに暮らしてきたおかげで貯金もできた。そういうわけで小和田君は京都の地図を広げて引っ越し先を検討した。大学に通っていた頃は、大学のそばの静かな住宅街に暮らしていた。

「じゃあ、今度は京都の真ん中に住んでみよう。なにごととも経験だ」

かくして小和田君は独身寮を脱出し、その四月から京都の街中に引っ越してきた。

家財道具はほとんどなかったの、恩田先輩や桃木さんに手伝ってもらい、立松君のおんぼろ自動車で一回運べば事足りた。引っ越し先は四条通より一本南にある綾小路通に面

した古いワンルームマンションの五階である。

エレベーターもなかったが、その立地にしては家賃も手頃であり、なによりも独り占めできる風呂と便所がある。親元を離れて以来、四畳半と独身寮にしか暮らしたことの無い小和田君にとって、そんな環境は夢のようだった。彼は誰に気兼ねすることもなく風呂に入り浸り、出すものがあるがなかろうが便所に籠（こ）もった。

『独身寮の賢人』と呼ばれ、田んぼのタニシと見分けがつかないほど静かな生活を送っていた小和田君が四条烏丸の街中に引っ越した。ルイ・ヴィトンとティファニーから歩いて二分、もはやすっかり都会人きどり！」

その知らせは、独身寮の仲間内に驚きをもって伝えられていった。

「いい気になっているのではないか」「女ができたのではないか」「いずれにせよ宝の持ち腐れ！」という人もあった。そして恩田先輩と桃木さんは引っ越し祝いをくれた。恩田先輩は額入りのアルパカの写真、桃木さんは野菜ジュースの詰め合わせである。

そうして四カ月が過ぎた。

小和田君はいつだってそこそこ満足している人物だが、街中の暮らしにも満足した。

近所のおにぎり屋にはステキなお姉さんがおり、大きな書店もあり、烏丸の地下にある喫茶店「いのん」にはステキなお姉さんがおり、映画館もあり、英会話教室にはステキなお姉さんがおり、牛丼屋もある。地下鉄の四条駅にも歩いてすぐだから、通勤にも時間はかからない。

「それなりにパラダイスだ」

彼はそんなことを考えた。

その夏の朝、ぼんぼこ仮面にいちゃもんをつけられるまで、彼は平和に暮らしてきた。

○

ふたたび朝の校庭に戻ろう。

「私生活の充実」を図って小和田君が街中に引っ越した経緯を語っている間も、朝の校庭では何一つ事態は好転していない。彼がひとり淋（さび）しく椅子（いす）に腰掛けているばかりだ。

身体（からだ）を縛っている黒と黄のまだらの紐（ひも）は悪魔の臍（へそ）の緒のように頑丈で、そのおびただしい結び目は脱出を志す者の意気を挫（くじ）く。「奇術師フーディーニばりの縄抜けを見せてやろう」とモゾモゾやっていたら、紐がキュッと締まって股間へ巡る血が止まりそうになった。小和田君は「きゃっ！」と乙女のような悲鳴を上げた。

「僕がいったい何をしたというのか。正義の味方ともあろう者が、善良な市民を悪人呼ばわりして、こんな風に紐（ひも）でぐるぐる巻きにして…」

小和田君は静かに憤っている。

校庭は相変わらず静かで、フェンスの向こうにある木屋町通もひっそりとしている。夜に繁盛する町だから、この時刻がもっとも人気がないのだ。退屈しのぎに本を読もうにも、砂埃（すなぼこり）にまみれて転がっている通勤鞆（かばん）には手が届かない。怒りにまかせて拳を振り上げることもできない。

小和田君は冤罪の歌を歌った。

「冤罪、冤罪、これは冤罪♪」

その歌声は切なく空に吸い込まれてしまうばかりで、早朝の校庭には聞く者としていない。学生時代を通じて無為無力であることに対する耐性を培った小和田君でも、さすがに空（むな）しくなった。

「どうせ誰か来るまで助からない。寝ちまおう」

彼は豪胆にも目を閉じた。

やがて身体（からだ）がゆっくりと傾いて、危うく椅子（いす）が倒れるところで目覚めた。

「あぶないあぶない」

そこで小和田君は鼻の右側が痒（かゆ）いことに気づいてゾットした。不幸なことに、彼は自宅にも研究所にも「孫の手」を常備しているほどの痒がり屋である。痒みを追い払おうと顔の皮膚を東へ西へと動かしたが、痒みはつるつると滑るように逃れて、どういう仕組みになっているのか、縦横無尽に走り回った。「ひゃあ！ あふ！」と奇声を上げて顔を歪（ゆが）めていたら、視界の隅に人影が見えた。

校庭の隅にヴァイオリンケースを抱えた若い女性が立っていて、小和田君の百面相を冷徹な眼差（まなざ）しで観察しているのである。彼は咳（せき）払いをして奇声をごまかし、崩れきっていた顔面を整えた。「すみません！ ほどこいてもらえませんか？」と叫んだ。

彼女は遠くから「何をしてるんですか？」と、いぶかしそうに声を掛けてきた。

「怪しい者ではありません。ちょっと悪いやつにイタズラをされて」

その女性は黒猫のように用心深く近づいてきた。

彼女は大学生らしい。橙（だいだい）色のTシャツを着てジーンズを穿（は）き、髪は短くして、『レ・ミゼラブル』に登場する浮浪児みたいな帽子をかぶっている。ヴァイオリンのケースは古道具屋の店先から持ってきたような年代物である。

=====

彼女は小和田君のそばまで来ると足元にヴァイオリンケースを置き、現代美術を鑑賞す

るように彼の周囲を回った。腕組みをして眉をひそめ、「がんじがらめじゃないですか」と感想を述べた。

「ねえ？ ひどいもんですよ。ほどいてもらえませんか？」

「無理ですよ、これ。堅結びが二十個ぐらいあるもの」

「でもこのまま置いていかれると、僕はおそらく午後二時頃には日射病で死にます」

彼女はしゃがみこみ、ヴァイオリンケースを開けた。覗（のぞ）いたところ、中に入っているのはヴァイオリンではないらしい。彼女は玩具（おもちゃ）箱を掻（か）き回すような音を立てていたが、やがて鋏（はさみ）を取り出した。

「これで切ってあげます」

「素晴らしい道具を持ってますね。ありがたい」

数分後には、小和田君は自由の身となっていた。

彼は思いきり伸びをして、朝の空気を吸い込んだ。椅子（いす）に縛られている時と、こうして自由になった時とでは、空気の味も見える景色も違う。鳥（からす）が校舎の屋上で鳴いているのが聞こえた。

彼が通勤鞆（かばん）を拾って砂埃（すなぼこり）をはたくと、彼女はヴァイオリンケースを抱え上げた。

「ありがとうございました」と小和田君は頭を下げた。

彼は腕時計を見て、「七時半か」と呟（つぶや）いた。「おかげで土曜日の朝が台無しにならずに済みました」

「こんな目にあったんだから、じゅうぶん台無しだと思いますけど」

小和田君は頬（ほお）を膨らませて言った。「ぼんぼこ仮面というやつがいるでしょう？ 彼にやられたんです」

彼女は首をかしげた。「でも…あの人は正義の味方じゃないの？」

「『おまえは悪の帝王だ』みたいないちゃもんをつけられました」

「えー、そうなんですか？」と彼女は顔をしかめた。「あなたが悪の帝王？」

「そんなけっこうなものに見えますか？」

「見えませんね。カリスマ性はかけらもなさそう」

「そんな器でないことは誰よりも僕が一番知ってますよ、あなたに言われるまでもなく。僕ほど人畜無害な存在はないと思う」

=====

「でも、興味深いですね」

「僕が？」

「いいえ、ぼんぼこ仮面が」

彼女は目を細めて朝の陽射（ひざ）しに照らされるビルを見上げていた。小和田君が怪

訝（けげん）に思っていると、彼女は我に返って微笑（ほほえ）んだ。先に立って歩きだしながら振り返り、「助けたお礼に珈琲（コーヒー）をおごってもらえますか？」と言った。そのとき、小和田君は彼女にどこかで会ったような気がした。

朝の木屋町をいっしょに歩きながら、「どこかで会いましたっけ？」と彼は訊（たず）ねた。

「それは古風なナンパの手口ですか？」

「ナンパなんて！」と小和田君は心外そうに言った。「僕には恋人がおります」

「それはけっこうですね。毎日らぶらぶ」

「残念ながら毎日は無理だ。彼女は地球の裏側にいるんです」

「裏側？」

「ロンドンですよ。僕と違って、彼女はグローバルな人なのだ。でもまあ、そんなことはいいや。飲もう、珈琲を」と小和田君はあくびをしながら言った。「土曜の朝は珈琲と決めてるんです」

「お名前うかがっていいですか？」と彼女は言った。

「小和田です。宜（よろ）しく」

「宜しく。私は玉川といいます」

○

小和田君が研究所に勤めだしてから三年目になるが、これまでの二年間は週末の過ごし方に無頓着であった。

毎日仕事に出かけるというのは億劫（おっくう）なものだから、ただ「仕事をしないでもいい」というだけで幸せな気分になってしまう。小和田君のような筋金入りの「怠け者」は、後藤所長の言う「私生活の充実」を図るよりも前に、まず「仕事をしないでもいい」という満足感に浸っているだけで貴重な週末を棒に振りがちである。そもそも、缶珈琲一つで幸せの味を嚙（か）みしめる能力を持つ男が、よけいな手間をかけて幸せを探しに出かける気にはなるまい。

ところがこの四月に街中に引っ越し、休日の朝に早起きして珈琲店へ出かける味を覚えてからというもの、小和田君は週末の過ごし方を抜本的に改革した。

=====

小和田理論によれば、週末を有意義に過ごすための大原則は以下の三点である。

- (1) 金曜の夜はいかなる約束も断り、すぐに帰って寝ること
- (2) 休日の朝七時半に珈琲（コーヒー）店へ出かけること
- (3) 一日の行動予定を手帳に書くこと

「たったこれだけのことで人生が薔薇（ばら）色に！」

小和田君が怪しい通販番組のようなおおざっぱなことを言っていると、恩田先輩は「金

曜の夜を活用しなくていいの？」と指摘した。「同期の飲み会とか、そういうのあるんじゃないの？」

「金曜日の夜を敢（あ）えて犠牲にすることによって、土曜日と日曜日を生かす。肉を切らせて骨を断つということです」

「ふうん」と恩田先輩の返事はそっけない。

同期の立松君は、「どうせ土日になっても何もすることないだろ？」と憂鬱（ゆううつ）な顔をして言った。「それなら早起きするより寝てるほうがマシじゃないか。馬鹿馬鹿しい」
励ましてくれたのは桃木さんばかりである。「すごいね、小和田君。成長したね」

小和田君はこの三原則に従って、半日寝て過ごしていた独身寮時代と袂（たもと）を分かった。だからといって彼が波乱含みの人生を求めて、たとえば人妻との恋の火遊びに耽（ふけ）ったり、インターネットを活用した週末起業を企てたり、新人賞に応募するために長編小説を書いたりしているわけではない。彼はただ街をぶらぶらしているにすぎない。したがって、禁じられた恋に生きる若者や、青年実業家や、作家志望者たちからは、これだけの努力を払ってもなお「怠け者」呼ばわりされるかもしれない。だが、おおむね机上の人であった小和田君にとって、たんなる街歩きでさえ冒険であることを忘れてはならぬ。朝の珈琲店へ出かけることもまた小さな冒険であり、小冒険を笑う者に大冒険を語る資格はないのである。そうとも。

「やっぱり何事も経験だな！」

彼は後藤所長の助言に感謝した。とはいえ、彼が死守しようとしている金曜日の夜を、酒で台無しにするのも所長であるのが皮肉であった。前夜、もし淋（さび）しがり屋の所長に誘われなければ、万年床でたっぷりと眠って、爽（さわ）やかな土曜の朝を迎えていたに違いないのだ。

小和田君は木屋町通を歩きながら、窮地を救ってくれた玉川さんにそんなことを話した。

「じゃあ、昨日の夜は寝てないんですか？ 呆（あき）れた」

「玉川さんだって、徹夜したんじゃないんですか？ こんな時間に木屋町を歩いてるんだから」

「私は違いますよ。ちょっと仕事の都合で早起きしただけ」

「あれ？ 学生さんかと思ってた」

「学生ですけど、週末はアルバイト。でも、小和田さん大丈夫ですか、足取りが怪しいですよ」

「平気です。少しはあの校庭で眠ったし、珈琲（コーヒー）を飲めば目も醒（さ）める」

「あんながんじがらめにされてよく眠れましたね。これから家に帰って眠ればいいのに」

「そうするとね、昼夜逆転になるでしょう。ひいては日曜日を失うことになる。ここは

一つ踏ん張らなくてはいけないところなんです。それに、今日も明日も予定がたくさんあるんだ。ぼんぼこ仮面のせいであんな目にあったけれど、珈琲さえ飲めば体勢を立て直せます。僕は自分で決めた予定を守る男だ」

やがて彼らは三条通に出て、西へ折れた。

河原町通を渡り、まだシャッターの下りている静かな商店街のアーケードに入っていった。パチンコ屋、薬局、定食屋、洋服屋に靴屋、鞆（かばん）屋、扇屋、十字屋などが並んでいる。どの店も開店まではまだ間があり、ひっそりとした朝の商店街では、「かに道楽」の看板が人類死滅後の世界の怪獣のように見えた。彼らはそこで北へ折れ、矢田寺の門前を通過して、寺町通を歩いていった。昼日中の賑（にぎ）わいが想像できないほどがらんとした寺町通は、まるで異世界に通じるトンネルのようである。

彼らは寺町通にある「スマート珈琲店」に入った。落ち着いた雰囲気の内には珈琲の香りが柔らかく充（み）ちて、小和田君のように休日の有効活用を志す人々が集っている。小和田君は週末になると、綾小路にある自宅を出て朝の寺町通を抜け、この珈琲店に通うことにしているのである。

「これで予定通りだ」と彼は呟（つぶや）いた。

珈琲を飲みながら、玉川さんは「ぼんぼこ仮面のことですけど」と言った。「本当に身に憶（おぼ）えのないことなんですか？」

「ありませんよ。正義の味方に怒られるようなことはしてない。だいたい僕は京都に引っ越してきたのもこの四月からで、平日はずっと田んぼの真ん中の研究所に籠（こ）もってる研究者だ。週末だって、街をぶらぶら歩くだけの怠け者ですよ。『悪の帝王』なんて神経を使いそうな仕事は、頼まれたってやるものか」

=====

妙な威張り方をして、小和田君はタマゴサンドウィッチを頬（ほお）張る。

「たしかに小和田さんには勤まらなさそう…」

「他人にそう断言されると悔しいものだね。やろうと思えばやれます。ただやろうとしないだけでね。つまり僕は消極的善人ということになる」

「ぼんぼこ仮面には何を言われたんですか？ もう少し詳しく教えてくださいませんか？」

小和田君は思い出し思い出し、あの校庭におけるぼんぼこ仮面との対決の一部始終を語った。玉川さんはヴァイオリンケースから小さなノートを取り出して、何かをメモしている。「あ、それ、僕と同じノートですね」と小和田君は嬉（うれ）しくなった。

「仕事に使うノートなんです」と彼女は言った。

「玉川さんのヴァイオリンケースからは何でも出てくるなあ」

「七つ道具が入ってるの。遭難しても大丈夫」

「君のアルバイトって、〇〇？」

「まさか。事務所に勤めてます。そんなに冒険的な日々を送ってるわけではないけど、なんとなく」

小和田君は頷（うなず）いた。「その心がけは素敵（すてき）です。日常を笑う者に冒険者は勤まらない」

「でも、ぼんぼこ仮面に捕まるなんて、じゅうぶん冒険ですね」

「そんなにぼんぼこ仮面のことが気になるの？」

「それは気になります。謎の怪人でしょ？ 面白いわあ」

「僕はあれですね、謎というだけでは気にならないな。自分にかかわりのない謎は謎のままにあらしめよ、というのが父の教えだ。よけいな謎は解かない」

「呆（あき）れた。あんな目にあわされて、かかわりあるじゃないですか！」

「さあ。それはまだ分からない。正義の味方だって勘違いすることがあるだろう。だとすると、ぼんぼこ仮面などという阿呆（あほう）な怪人は僕の人生と何の関係もないことになる。どうぞ自由に、というところだ」

「謎を解きたいとは思わないんですか？」

「思わない。僕が潔白であることは僕が知ってる」

=====

「そんなに適当でいいのかしら。面倒なことになるかも」

「ぼんぼこ仮面は一日待ってやるみたいなのを言っていたし、慌てて考える必要もないでしょう。明日できることは今日しないでおこう」

玉川さんは驚いたらしい。「…豪胆なんですね」

「僕は豪胆ではない。でも億劫（おっくう）さが臆病（おくびょう）さを乗り越えるときがある」

「普通の人なら、もっと心配すると思いますけどね」

玉川さんは微笑（ほほえ）んでノートを閉じ、ヴァイオリンケースにしまった。

小和田君は珈琲（コーヒー）をお代わりしてゆっくりと飲んだ。そうして通い慣れた珈琲店の静けさに包まれていると、眠りが足りないことを除けばいつもの平和な土曜日の朝と変わりがなく、ぼんぼこ仮面との対面が、まるで夢であったように感じられる。「本当に夢だったんじゃないかな？」と彼は考えた。

やがて玉川さんが「さて」と膝（ひざ）を叩（たた）いた。「そろそろ仕事に行かないと。珈琲、ごちそうさまでした」

「いや、こちらこそ。助けて貰（もら）って感謝してます」

立ち上がる玉川さんを見て、ふたたび小和田君は「あれ？」と言う。「どこかで会った？」

「また、古風なナンパの手口ですか」

「失敬な。僕には恋人がいる」

「それではさようなら。地球の裏側の恋人に宜（よろ）しく」

玉川さんは珈琲店から出て行った。

小和田君は手帳を取り出して、いつものように予定を書きだした。「怠け者」の彼にしては珍しく、この週末は予定に充（み）ちている。この春までの自分であれば、こんなにくさんの予定をこなすことはできなかつたろう。彼は自分の成長ぶりに満足した。

「そうなのだ。ぽんぽこ仮面なんていうわけのわからんやつの言うことに耳を貸してるヒマはない」

=====

小和田君は手洗いに立ち、濡（ぬ）らした手拭（ぬぐ）いで汗を拭って気合を入れた。

そして土曜日という日常の冒険に赴いたのである。

○

ここでガムシャラに街を徘徊（はいかい）したりせず、新京極の映画館に潜りこむところが小和田君のステキなところである。「大冒険は映画館にまかせる」というのが彼の流儀だ。

街中に引っ越して以来、歩いていけるところに映画館がたくさんあるので、小和田君は手軽な大冒険に事欠かない暮らしをしていた。

彼が好むのは重厚な人間ドラマと言ったようなものではなく、たとえば上映が始まるや否や主人公が危機的状況に陥り、観客は手に汗を握り、そこに謎めいた美女が登場して謎めいたことを言い、主人公は鋭敏な頭脳を働かせて危機を切り抜け、観客がホッとしたのも束（つか）の間、また美女が現れて謎めいたことを言い、新たなる危機が主人公を襲って息をつく隙（ひま）もなく、ふいに爆発が起こったり、美女が悲鳴を上げたり、自動車が橋から落ちこちたり、宝の地図が奪われたり、美女が奪われたり、愛が芽生えたり、美女を奪い返したり、いろいろなことがあった揚げ句、美女と主人公が接吻（せつぷん）して終わる一群の作品、つまり冒険活劇である。「冒険活劇は映画館で観（み）なければいけない」というのが彼の意見であり、逆に言うと小和田君は、映画館で観た冒険活劇にかぎっては、どんなに阿呆（あほ）らしい内容であっても一切を許す広い心を持っていた。

朝九時の映画館はまだ客も少ない。冷房がきいていて快適である。

小和田君は売店でポップコーンとコーラを買い、意気揚々と席についた。場内の明かりが落ちると、もうワクワクしてきた。「京都フラッシュニュース」や洛東ライビングスクールのCM、他の映画の予告編を楽しんで映画的气氛を盛り上げきったところで、本編が始まった。

きちんと主人公が危機的状況に陥っているので、小和田君は満足した。美女の横顔にも満足した。そこまではきちんと観ていたのだが、前夜の寝不足がきいてきて、彼はいつの間にか眠っていた。

小和田君が目を覚ますと、一切の冒険は終わり、主人公と美女が抱き合っていた。ここで「ああ映画を観損ねた」とがっかりするようではまだ修練が足りない。

スクリーンの向こうで何らかの大団円が繰り広げられた、という余韻がある。それだけで小和田君はとても充実した気持ちになった。たっぷり眠ったためか頭もすっきりしている。彼は「良い映画だった」と満足した。

上映が終わってあたりが明るくなると、観客が立ち上がりだす。小和田君が出ようとすると、視界の隅を見覚えのある顔が横切った。首をひねると、一人の女がせかせかと横扉から出て行った。その横顔は、先ほど珈琲（コーヒー）店で話をした玉川さんにそっくりである。

「おかしいな。さっき彼女は仕事に出かけると言っていたけど」

小和田君は怪訝（けげん）に思った。「それとも、気のせいかな」

ボンヤリしながらロビーに出て行ったせいで、小和田君は喫煙スペースから出てきた三十代半ばぐらいの男とぶつかった。無精髭（ひげ）を生やし、派手な柄のシャツを着ている。相手はチッと舌打ちして小和田君を睨（にら）むようにしたが、無言でトイレに歩いていった。煙草（たばこ）の匂（にお）いが鼻をついた。

小和田君は片づかない気持ちのまま、映画館を出た。

映画館に入ったときには閑散としていた新京極も休日の賑（にぎ）わいを見せている。半袖からのぞく二の腕の白さも眩（まぶ）しい美女たちについて目をとられながら、小和田君は新京極を下っていった。土産物屋を覗（のぞ）いたり、ドラッグストアの軒先に積み上げられた箱入りの栄養ドリンクを眺めたりした。ゲームセンターには夏休みの若者たちがたむろしている。蛸（たこ）薬師を東に折れると、そこはもう新京極のアーケードのように陽射（ひざ）しを遮るものがなく、強烈な光がぎらぎらと路上に照りつけている。

小和田君は洩（も）れてくる冷房に吸い寄せられるようにロフトに入り、母に渡す誕生日プレゼントを探した。奈良に住む両親が京都まで遊びに来ることになっているのである。

「母さんは何を喜ぶか。これは難しい問題だ」

小和田君は勤め先でも見せないほど難しい顔をして、色とりどりのクッションを物色していたが、やがて布団売り場からの視線を感じて顔を上げた。「彼女か？」と思ったが、彼がよく確かめる前に、相手の姿は見えなくなってしまった。

「どうも気になるなあ」

小和田君はロフトを出て、蛸（たこ）薬師で立ち食い蕎麦（そば）をすすった。彼は空

腹になると手が震えて万事に悲観的になるという癖があるので、街中を歩いているときにはしばしば立ち食い蕎麦で空腹を紛らすのだ。

アツアツの天ぷら蕎麦を食べ、手拭（ぬぐ）いで汗を拭いながら出てくると、蛸薬師に面した商店の前のできている行列に玉川さんが並んでいるのが見えた。こちらを見ないフリをする努力がありありと透けて見える。

鈍感な小和田君も「これは怪しい」と思った。のんびりと新京極へ向かうと見せかけて、いきなり走り出した。振り返ると、玉川さんが慌てて行列を離れるのが見えた。

「間違いない。彼女は僕を尾行してるぞ」

後ほど小和田君は、「何も逃げることはなかった」と思うようになる。しかし、ひとたび駆けだして「追いつ追われつ」の関係が確立されてしまうと、なかなか立ち止まりにくいものだ。かつては美女に追われることを夢みたこともあったが、実際に追われてみると気味が悪かった。

かくして無茶苦茶（むちゃくちゃ）な逃避行は続いた。

小和田君は新京極から寺町通へ、寺町通から新京極へと、二つの通りをつなぐ細い路地を行ったり来たりして、相手を攪乱（かくらん）する作戦に出た。あっという間に汗が噴き出してくるので、汗を拭（ふ）く手拭いをひらひらと舞わせながら走った。寺町通と三条通が交差する「三嶋亭」の前を駆け抜け、三条通を東に折れて走り、ふたたび新京極の映画館の前までやってきた。

なんとか振り切ったかに思われたが、相手はしつこい。寺町通へ通じる路地から玉川さんが姿を見せた。

小和田君はふたたび走りだし、新京極から六角通へ折れ、鰻（うなぎ）屋「京極かねよ」の前を通り過ぎ、次に右手に延びる裏寺町通という細い通りに入った。

小さな寺が並ぶ通りを駆け抜けながら、彼は今朝見たアルパカの悪夢を思い出した。

「あれは予知夢だったのか！」

彼は河原町OPAの裏手を駆け、ビルの壁面に突き当たったところで右に曲がった。路地はくねくねと新京極へ続いている。追っ手を混乱させるべく、彼はそのまま路地を辿（たど）らず、すぐに右手に延びる別の路地へ駆け込んだ。青々とした柳が枝を垂らしているのが見えた。タヌキの置物がたくさんおかれた八兵衛明神がある。柳小路である。

=====

小和田君は硝子（ガラス）戸を開けて薄暗い煙草（たばこ）屋に飛び込んだ。店内は四畳半ほどの広さで、路地に面した小窓の前に小さな籐椅子（とういす）が置かれ、小さな婆（ばあ）さんがくつろいでいる。膝（ひざ）には太った猫が丸まっている。彼女は、脇に置かれたブラウン管テレビに映る吉本新喜劇に見入っていたが、飛び込んできた小和田君を見上げた。

「あれ、小和田さん。お久しぶりねえ」

婆さんはニコニコした。「どうしたの？」

「匿（かくま）ってください。追われてるんです」

○

「おやおや、女の子が走っていったよ」

煙草屋の婆さんは甘納豆を食べながら独り言のように呟（つぶや）いた。「元気ねえ」

小和田君は煙草屋の奥に続く廊下の暗がり立って、表の音に耳を澄ましている。追っ手はいったん通り過ぎるかに思われたが、やがて戻ってきた。煙草屋を覗（のぞ）き、「おばあちゃん」と言う声が聞こえた。

「こっちに若い男の人が走って来ませんでした？」

「いや、誰も通らなかったけれどねえ」

「そうですか…ありがとう」

「玉川さん」という男の声がして、路地を駆けてくる音が聞こえた。

「もう！」と玉川さんが憤然とした声を上げた。「浦本さんが先回りするはずでしょう？ おかげで見失ったじゃないですか！」

「そう言わないでくれよ。あいつ、意外に足が速かったね」

玉川さんが可愛く溜息（ためいき）をついた。

「真面目（まじめ）にやってください。さっきだって、ぼんぼこ仮面追いかけてるのかと思ったら新京極で映画観（み）てるし。信じられない…」

「あらゆる尾行テクニックをつかったけど、振り切られたんだ。相手は怪人だからね。頑張ったんだから、ちょっと映画館で休憩してもいいじゃない？」

「どうせすぐに諦（あきら）めたんでしょ？ 浦本さん、尾行テクニックが大したことないから」

「君だって彼に勤づかれてたろ？」

「ぼんぼこ仮面の手がかりがこれで消えたわ。あー」

二人のやりとりを聞いていたが、小和田君には彼らが「ぼんぼこ仮面」にやたらと興味を持っているということしか分からなかった。

=====

婆（ばあ）さんが小窓から「浦本さん！」と声を掛けた。「また、あなた、うちの猫をいじめに来たの？」

男が「婆さん！」と言った。「勘弁してよ。さっきだっていじめてないよ」

「ともかく、うちにはもう二度と来ないでください」

婆さんはビシヤリと言った。「煙草（たばこ）も売りませんよ。もう絶対！」

浦本という男はまだ外で何かぶつぶつ言っている。

「どうするんですか？ 私の給料払えるんですか？」と玉川さんが鋭く問う。

「払ってみせるよ…今、考えてるところだ」

「クライアントに何て言うんですか？ アルパカ事件の報告どうします？」

「あんなクソジジイのことはしばらく忘れようぜ。俺（おれ）あいつキライ」

「浦本さん、もっと大人になって！ 現実を見つめて！ 事務所を追い出されたら、行くところありますか？ ないでしょう？ 言っておきますが、たとえ浦本さんが路頭に迷っても、給料は頂きますから」

「玉川さん、頼むから俺に考える時間をくれよ」

男が悲痛な声で言った。

小和田君は玉川さんの畳みかけるような口調に感心した。それと同時に「アルパカ事件」という謎めいた、かつ不気味な言葉に衝撃を受けつつも、「何のこっちゃ」と思った。

煙草屋前の路上で続く賑（にぎ）やかな諍（いさか）いを尻目に、婆さんは猫を床に優しくおろして立ち上がった。廊下に隠れている小和田君のところへ来て、「あなた、こっちへおいでなさい」と耳打ちした。まるで追われた人を匿（かくま）うのが老後の楽しみ、というようなうきうきした口調である。

「どこへ行くんです？」

「うちの裏口、裏の定食屋に通じてるから。そこからお逃げなさい」

「お婆さん、あの二人、知ってるの？」

「若い子は知りませんが、浦本さんは今朝までうちの二階に下宿してた人ですよ」

「何者かな？」

「本人は探偵だって言い張ってたけど、胡散臭（うさんくさ）いですね。猫をいじめる人間にロクな人間はいません。でも、あなたは猫を大事にする人だから大丈夫」

線香の匂（にお）いが漂う廊下を抜けていくと、木製で小窓のついた貧相なドアがあり、その向こうは定食屋の事務所に通じていた。

=====

婆（ばあ）さんが言うには、この定食屋も婆さんの所有する店だという。小和田君はドアを開けながら「ありがとう」と礼を言った。

「また追われたときには、おいでなさい。遠慮はいりませんよ」

「いつも追われてるわけじゃないですよ」

彼が事務所から店舗の方へ出て行くと、店の人間は少し驚いた顔をしたが、何も言わなかった。このように柳小路の煙草（たばこ）屋から裏寺町の定食屋へ抜ける人間がときおりいるらしい。かくしてやすやすと脱出口は開かれ、小和田君は謎の二人組から逃れることができたのであった。

そのまま、河原町OPAと浄心寺の間を抜ける細い通路を通過して、河原町通へ出た。

「あの人たちは何者だ？ ただ充実した週末が過ごしたいだけであるのに、なぜぼんぼこ仮面やらああいう探偵やらが邪魔をするのか。僕が何をしたいのか。大冒険は映画だけでたくさんですよホント」

彼は雑踏に紛れると、四条河原町の交差点を東へ折れた。人波をかき分けるようにして、木屋町を通り過ぎ、やがて四条大橋にさしかかる。照りつける陽射（ひざ）しに顔をしかめるようにして、大勢の人が往来していた。橋の上に出たとたん、空が広くなったように感じられる。水嵩（みずかさ）の減った鴨川はぎらぎらと輝き、兩岸に続く街の景色は、熱気のためか、膜がかかったように曖昧（あいまい）に見えた。

「追いかけてっこしてる場合じゃなかった」

彼は腕時計を見ながら呟（つぶや）いた。「待ち合わせに遅れてしまう」

汗を拭（ぬぐ）つつ目指すのは四条大橋を渡った先、祇園である。

かつて所長が「この鰻（うなぎ）屋を知っていれば自慢できますよ」と薦めてくれた店は、花見小路から一本西に入った細い路地に面しているはずだ。四条大橋を渡りながら、炭火で焼かれた鰻の香ばしい匂（にお）いが、鼻先を流れるような気がした。濃密に光る蒲焼（かばや）きをのせた温かい飯が、今にも口に飛び込んでくるようで、彼はタマラナイ気持ちになった。先ほどの追いかけてっこで、もう腹が減っている。鼻先を漂う旨（うま）そうな蒲焼きの幻影を追いながら、彼は炎天下を歩いていく。そして、蒲焼きの香り漂う路地から暖簾（のれん）をくぐって狭い階段を上った先、簾（すだれ）で陽射しを遮った小さな座敷では、学生時代「一乗寺杯」を巡って戦った麻雀（マーじゃん）仲間にして現在は京都府警に奉職する夏目巡査が、彼の到着を待つ。